

山とスキー

第七十九號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年一月廿八日印刷納本

昭和三年二月一日發行
(每月一回
一日發行)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 日 號 九 十 七 第



記 事

登山史上の人々

大 島 亮 吉 〔一〕

第一回インターカレッジ・スキー競技會

平 塚 直 秀 〔二〕

ヘルヴェチア・ヒュツテの建設

山 崎 春 雄 〔四〕

スキーに對するワツクスの手法

ハンネス・シュナイター氏述
宮 下 利 三 譯 〔三〕

海 外 通 信

廣 田 生 〔七〕

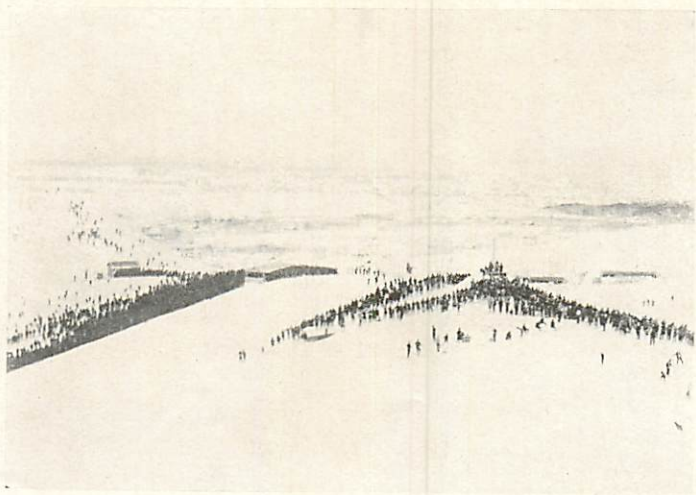
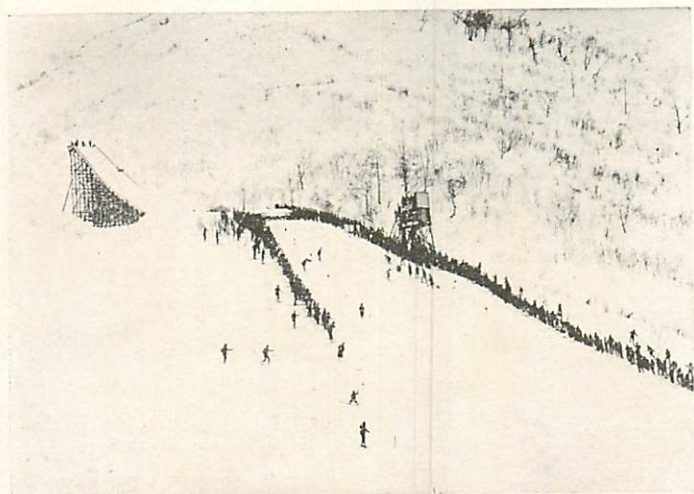
寫 眞 版

Trojani 君の活躍振り

第六回全日本スキー選手権大會

昭和三年二月發行

第六回全日本スキー選手権大会



登山史上の人々

大 島 亮 吉

近代科學的登山の鼻祖リッスニール

凡そアルプスに於ける登山の歴史として眞に記録せらる可きは正に彼の世界最初の山岳會なる英國山岳會 (The Alpine Club) の一千八百五十七年より同五十八年の冬に於て設立せられし時より概ね一百年以前たる一千七百六十年以後であらねばならぬと謂ふ。アルプスに於ける高峯大岳の重要な登頂の起源は總て此年以後に於て行れたのである。一千七百八十六年八月八日午後六時三十分に於てアルプスの王座モン・ブロン一万五千七百八十二呎の嶺の雪が初めて若き勇敢なるシャモニの山案内者ジャック・バルマア (Jacques Balmat) 及び村醫ミッシェル・バックル (Michel Paccard) とに依つて踏まれ、斯くてアルプス諸高峯大岳究高登頂の序幕は開かれたのであつた。其以前アルプスに於て登頂せられたる諸山頂は僅かに十四座を數ふるに過ぎず、而も就中名だたるものと言へば、瑞西エンゲルベルグ谿谷の上に聳ゆる名高き峰ティトリス (Titlis) 一万六百二十七呎及び彼のレマンの湖上高く聳ゆる名峯ダン・デ・ミディ (Dent du Midi) 一万六百九十六呎の如きものである。而して又モン・ブロン初登頂に關しては不可離的關係に在りて、其山嶺に到る實際の登路を求むる爲めに賞金を賭けて其登頂を奨勵し、自身も亦た其の第三回目の登頂を親しく初登頂者バルマアの案内にて爲せる瑞西はジュネーヴの人、科學的登山者として、其名登山史上不朽なるオラース・ベネディクト・ドゥ・ソフスニール (Horace Bénédict de

Saussure 1740-1799) 以前に於いて眞に近代的意義に於ける登山者としての人を見出し得ない(筆者註。此點に關しては多くの登山史家中に異論がある。以上はクーリッヂの説に依る。W. A. B. Coolidge, *Swiss Travel and Swiss Guide-Books*, 1889, p. 69 et seq.)

斯くて近代的登山史の序幕はモン・ブロン初登頂の其れに依りて開始せられ、此のジュネーヴの自然科学者にして且又政治家たりし名士ソッスールが登山史上より觀じての精密なる見解よりすれば近代的登山の鼻祖と爲り、彼の登山家クーリッヂをして「The father of scientific mountaineering」と呼ばしむるのである。然れば筆者が、此の『近代歐洲登山小史』の筆を我がソッスールより起さんとする所以のものも又實に其點に存するのである。

アルプスに於ける『近代科學的登山』の鼻祖たる我がオラース・ベネディクト・ドゥ・ソッスールの生涯、其登山經歷其他に關しては現今幾多の文献存して、彼のモン・ブロンに關しての歴史研究文献中最大の名著なりと稱せらるゝ英國山岳會第八代の會頭チャールズ・エドワード・マシューズ (Charles Edward Mathews, 1834-1905) が唯一の著「The Annals of Mont Blanc」(1896) 附録文献目録に於いて約百を超ふるもの擧記せられ在り、凡そ數頁に過ぎざる短少瑣末の文献と雖も、其がことにアルプスの近代登山發達史を叙するものなるに於いては必ず其中に彼れの事蹟生涯に關して數語より數行を費して居る程に其れに就ての文献は頗る多くして、筆者の其を今爰に殊更に擧記するの必要を認めない程である。

乍然就中其叙事精細詳密を極め、其以前に於いて新たなる資料の提供せらるゝ事極めて尠少なりしソッスール傳に多大なる貢獻を爲せるものは、彼の英國現存の大登山者にして又登山史の眞摯なる研究者なるダーグラス・ウィリアム・フレッシュフィールド (Douglas William Freshfield 1845) と同じく又登山に關する文献に就ての周到該博なる研究者なるアンリイ・エフ・モンタニエ (Henry F. Montagnier) との共著に爲りて、一九二〇年に漸く出版せられたる大著「The life of Horace Benedict de Saussure」の一著即ち是れである。(註) 筆者が是れより以下に記せんとする所のは、大部分此著に依據し、傍ら彼れが大著「Voyage dans les Alpes, precedes d'un Essai sur l'Histoire Naturelle des Environs de Geneve. (1779-1796) (初版及び第二版横有恒氏所藏) を參酌し、以つて我が近代科學的登山の鼻祖の生涯を些か傳へんとするのである。ソッスール

小傳の起稿に際して、先づ筆者は、フレッシュフィールド自身登山史上の明らかなる罅隙を充す爲めの一勞作なりと謂ふ所の、其の貴重なる努力に對し、多大なる感謝と敬意とを表せざるを得ないのである。

【註】

フレッシュフィールドの此のソッスニールに關する研究は實に長年月の努力に依りて成る深奥精細なるより登山史上に於ける

其價值頗る大なるものにて、爲めに嘗てはソッスニールの教授たりしアカデミー・ドゥ・ジュネーヴの後身なるユニヴェルシテ・ドゥ・ジュネーヴにては、同大學文學部の提言に依りて一九二三年五月十一日の日附を以つて、フレッシュフィールドに *Le Docteur des Lettres honoris causa* なる學位を大學總長 R. Weber の名に依りて贈呈して其の功績に感謝して居る。 (*Alpine Journal*, vol. XXXV, No. 226, 1923 p. 121 參照) フレッシュフィールドのソッスニール傳を録せんとする企劃も又六十年前彼れがシャモニイを訪ひし時に始まり、後一八七八年にジョン・ラスキン (ラスキンは其の少年時代より *Voyages dans les Alpes* の熱心なる愛讀者にして生涯ソッスニールの大なる崇拜者であつた。) の奨めありたるも時と資料とを得ず、漸くモンタニエ氏の助力ありて其の多年來の宿望を達したる事を同著序文中に自記して居る。(同著序文 pp. V, VI.)

又近代に至りてはフォーブス (Forbes) サオルフ (Wolf) サント・パウヴ (Sainte Beuve) テップフエ (Toppfer) ファウル (Favre) ナヴィル (Naville) ありと雖も、洵に登山者、地質學者、政治家、市民、哲學者としての彼れの生涯を遺憾無く後世に傳えし傳記者の出現をソッスニールが有したるには、彼れの死後一世紀間以上を要せしものなのである。

凡そ山岳に對する愛の種子は瑞西に於ては彼のコンラート・ゲスネル (Konrad Gesner 1516-1565) に依りて植えられ、アルブレヒト・フォン・ハラー (Albrecht von Haller) 此を培ひて、以て漸く根をすに到つたのである。然るに其をして汎く西部歐羅巴に散在せしめし者は斯く云ふ我がソッスニールの功績で在つた。然れど彼のジャン・ジャック・ルッソウ固より此點に於て決して閑却せらる可き地位の者では無い。嚴肅なる自然の形相に對してはルッソウは慥かに盲目であつた。山岳の呼聲に對しては彼れは惜むらく聾啞であつた。然しアルプスの前山、高地、瑞西低地の美はしき諧調ある風景、其の風光明媚なる湖水、草原、灰色に風雨に曝された、緩傾斜にして巾廣き屋根の百姓家、豐饒なる果樹園や葡萄園、花咲く山側の牧場等に對する鑑賞に於て、彼れは洵のバイオニヤであつた。而して彼れは自然への復歸を説いた説教者ではあつ

たが、然しアルプスへの好愛を唱導せし豫言者では無かつた。洵に瑞西の國民をして常に彼等の頭上高くに輝く尊貴にして永遠の氷雪に迄彼等の眼を擧げしめし者こそは、我がソッスニールであつた。今日ジュネーヴの人々が休日には於ける好適の遊歩地を成し、彼れの生地を影を掛け掛ける岩の胸壁と爲つて居るサレーヴ(Salève)の岩頂から程近き地に生れ、生ひ育ち、又モン・ブロンンの氷河を遠くに望みつゝ成長せしソッスニールが、彼れの少年時代より親しみたる風景の中より彼れの生涯の仕事として登山なるものを選び出だしたる事は、實に又無理からぬ事で無ければならぬ。

オラーヌ・ベネディクト・ドゥ・ソッスニールは一千七百四十年二月十七日、ジュネーヴの近郊、アルヴ(Alve)河の河岸なる一郡コンシユ(Chonche)に於ける彼れの家領の一たる莊園に於て出生した。彼れの祖先は十六世紀中葉佛蘭西及び伊太利亞よりジュネーヴに亡命して集ひ來りたる多くの宗教上の亡命者の一人であつた。即ちソッスニール家は北佛羅レン州より亡命せる一族であつて、今日尙ほローレンに於けるソッスニール家領の五ヶ村には其家名が嚴存して居ると謂ふ。初代モンジャン・ドゥ・ソッスニール(Mongin de Sausse)より數代を経たる後に於てソッシニール家は次第にジュネーヴに於て市民として市政上に勢力を得る様を爲つた。然しオラーヌ・ベネディクトの父ニコラス・ドゥ・ソッスニール(Nicolas de Sausse)に至つてジュネーヴの近郊ニ哩を隔てしフロンテネ(Frontene)に地をトして莊園と爲し、彼れはジュネーヴ共和政治に何等干與する事無く、單に一田舎紳士としての靜安なる生活を爲すを以て身自らを安んじて居た。

既に其出生からしてジュネーヴの一市民ではあつたが、然しオラーヌ・ベネディクトは決して都會に育ちし少年では無かつた。彼れが年齢二十五歳に至りて結婚を爲せし時迄彼れの家庭は常に山岳と湖水の莊麗なる風景を背後に置ける耕地、籬垣、ポプラの並木道、美はしき田園中に在つたのである。如何なる範圍迄彼れの經歷が其少年時代と青年時代とに於ける彼れを圍繞せし環境の爲めに影響せられて居るかと言ふ事は、主として登山者としての彼れの生涯を誌さんとする傳記々者の研究す可き興味ある主題たらねばならぬ。ソッスニールは彼れの名著『Voyages dans les Alpes』の序卷『Essai sur l'

Histoire Naturelle des Environs de Genève』の最初の頁に於て、彼れ自身彼れの環境よりして彼れの享けたる感銘に就て雄

辯なる證左と爲る可きものを表示して居る。即ち彼れは誌すらく

『ジュネーヴは其位置よりして其地に住む人をして博物學に對する趣味を喚起せしむる如く思はれる。自然は其が最も光彩ある局面を自ら呈示して居る。其は其地に於てアルプスの壯大なる山頂を戴く山岳の大圓形劇場の前景を形造る愛らしき低山地に圍まれし美しき河川の其處より流れ出づる、明朝紺青の湖光の聖らかなる美の無限を展開して居る。然も其等の風景は其山麓まで氷河と萬年雪の衣を纏ひ、山麓の森林と前山の美はしき綠色とに對しては驚く可き對照色を爲して居るアルプスの帝王モン・ブロンに依つて君臨されて居る。此の風光は觀者の眼を悦ばしめ、其が驚異すべき美を訪ね、究めんとする熾烈なる願望を喚起せしむる。』(ibid. Tome I. p. 12)

斯くてソッスニールはジュネーヴの近郊コンシユ(Conche)に於ける彼れの家領の莊園で生れ、又其地に晩年を送つた其處はジュネーヴの城門より隔たる二哩の地にして、アルヴ河の迂曲せる河岸に取り圍まれて居る。其處へ導く道路は檜の老樹影濃く、河岸に向つて多少急傾斜を爲して居る廣濶なる田野を横ぎつて居る。而して其の出生の家は繪の如く美しき牧場の中の如き樹蔭の中に建つ舊い百姓家を改造した靜かなる近代的な別墅であつた。更らに彼れが其生涯の中の最も幸福なる時代に於ける幾多の夏を過ごせしヂェントウ(Genthod)の莊園は前者コンシユの其とは全く異なりたる型式のものにて、其は富裕なるジュネーヴの市民の夏季に於る別莊の其れであつた。ジュネーヴ市を距る四哩、レマン湖の北岸に位置して、湖岸に接して建てられ、常にアルプスの高邁なる氷雪を遠望し得ると云ふのが大なる其處の特點であつた。モール(Môle)の右手にはモン・ブロンがモン・モウテ(Mont Maudit)とモン・ブロン・ド・タキユル(Mont Blanc de Taut)とを從へて聳えて居る。此はジュネーヴに於て『モン・ブロン』と呼ばれて居ると云ふ事をソッスニールは吾人に物語つて呉れて居る。更らに左に寄つてはエギュー・デュ・ヂェン(Aigulle du Géant)とグラント・ジャラス(Grande Trosses)とがエギュー・ヴェル(Aigulle Verte)の氣高き金字塔に依つて小さく見えしめられて居る。此山岳の遠望の大景こそ二十年間に亘つて終ひには彼れがアルプス最高の大山岳の嶺に自らの足を置く事に成功する迄屢々彼れを時には樂しましめ時には彼れに堪え難き迄登頂係戀の心を喚起せしめたものであつたのである。

年齢六歳と成やる否や、幼小なるオラース・ベネディクトは當時に於けるジュネーブ市の公共學校であるコレージュ(Collège)に送られた。而して直ちに彼れは其俊才を發揮して同校に於て優等の賞を受けた。然し此の學校生活中に彼れは學業の障害と爲るが如き力強き趣味を見出した。疑ひも無く彼れの田舎の家庭生活が彼れの戶外生活に對する熱情を醸さしめた。戶外に於ける長時間の逍遙と物語本の耽讀が其時代に於ける彼れの主たる慰藉であつた。十四歳にして、ソッスニールはコレージュからアカデミー(Académie)に進んだ。アカデミーは現今にては大學と呼ばれる可きものである。彼れと同級又は上級の生徒の中には高名なる歴史家シスモンディ(Simonetti)の父、植物學者ド・カンドル(de Candolle)等の名が今日でも發見出來ると謂ふ。ソッスニールは彼れが十八歳に成る迄にはジュネーブの近くの低山脈であるル・サレーヴ(Les Salève)ヴォアロン(Voirons)或ひは名高いジュラ(Jura)の山々等を殆んど跋渉し盡した。此等の諸低山地の逍遙の間彼れは植物の研究を愛好した彼れの母の爲めに數多く同山地の植物を標本として持ち歸つた。既に其時から彼れの心胸は山岳に對する熱情に依つて喰ひ込まれて居たのであつた。彼れは彼れの名著『Voyages dans les Alpes, Précédés d'un Essai sur l'Histoire Naturelle des Environs de Genève』の序巻と成れる『Discours Préliminaire』なる自叙傳的記述の中に於て、此等初期に於ける低山地の遊蹤を回顧して誌すらく

『余は小兒時代より山岳に對しての興味に就ては最も積極的なる熱情を有して居た。余は今尙ほ、余が最初にサレーヴの岩を余自身の手を以て掴みたる時の感動と、余の眼の最初に其の頂よりの展望を打ち眺めし時の悦びとを明らかに記憶して居る。』
メネン (Ibid., Tome. I. p. 3)

尙ほ彼れの吾人に記する所に依れば、彼れは此當時一般に全く孤獨の逍遙旅行を好み、自由氣儘に自然に親しむ事を愛したのであつた。而して彼れの其等初期の小旅は多く繪畫的な記述への資料を提供して、其大著『Voyage』の第一巻中に美しく點綴せられて居る。即ち其一二の例として此處に其等を引用する事とする。最初はソッスニールがジュネーブの近くなるジュラ山地最高の頂たるドール(Dole)を訪れた際の事である。筆者は其を『The Life of Horace Banthiate de

Sausure' の著者の言ふ所に依つてソッスニールの性格の種々な局面——即ち彼れの自然に對しての感覺、彼れの植物に對しての初期に於ける好愛、彼れの田舎人の簡易なる生活に對する憧憬と同情等の性格上の表現の一端を窺知せんとして引用するものである。

『濃き霧はレマンの湖、其を圍める丘、低き山々を蔽ふて居た。ドールの頂とアルプスの高き峰々とのみが唯だ其の表面を日に輝き彩られて居る廣大なる雲霧の敷物の上に山頂を抜き出して居る山々であつた。太陽の直光と雲の海の反射光とに依りて一際輝く雪厚きアルプスの峯々は總べて其の莊嚴さを遺憾無く顯現しつゝ、遙かの遠くに望まれた。然し余は恰も余が現在の位置を嵐の海の唯中に陸地を遠く隔りて而も近寄り難き暗礁岩壁を繞らした海中の孤岩上に在るが如く想像して、其の奇怪にして恐る可き事を想ふたので有つた。』と思へる間に漸次雲霧は上昇して其の陰暗の中に余を包み、扱ては益々余の頭上へと昇り行きたる時、俄然湖水と其の岸邊の日に輝き笑ひ、能く耕されし畑地、小さき町や繪の如き村々の點在して居る美なる光景が現はれて來たのであつた。

ドールの頂は青草の絨氈を敷いた様な美はしき台地と成つて居る。人々の記憶にも無き遠き往昔より毎年八月の第一及び第二の日曜日には此山麓近くに在るバイ・ドゥ・ヴァ(Days de Vaud)地方の村々からは主として若者娘等の總べてが、此山頂へ集まつて遊び愉しむ古き風習がある。此の二日間の休日、爲めに附近のシャレエの牛飼ひは牛乳と牛酪と其れから彼等の手で出来るあらゆる御馳走を用意して待つて居る。休息日を悦ぶ人達は其處へ來て種々なる愉樂を愉しむ。或る者は競技を爲し、又或る者は彈力のある氣持好い草生の上で踊り舞はり、而して疲れた者は休息を求めて斷崖の端に來て座しつゝ、彼等の眼前の美はしき眺望を愉しむ。老ひたる村人の一人は彼れの村の寺院の白き尖塔を指差し、尙や果樹園を認めつゝ、彼れの生涯の主なる出來事を回想し、又村を離れて旅した事のある者は、見ゆる限りの市々の名を指呼し、扱てはモン・セニイ(Mont Cenis)の峠の在る邊り迄遙るか羅馬へ導く街道を指示して居る。彼の不滅の都は此等の人々の心胸内へも深く喰ひ入つて居るのである。元氣な者は頂のジュネーヴ側なる斷崖の端を歩いて彼れの勇氣を人に示し、さう誇りながらぬが、然しより勇氣のある者は急峻な岩壁に生えて居る花を摘んで、彼れの熟練さを示して居る。彼れは綿の様な莖衣で知られて居る Leonpodium や黄金光の飾環を有つた Senecio alpinus 百合の如き香のするアルプスの三色菫、ヴァニラの芳香のする Satyrium nigrum 等を摘んで居た。すると又、近くでは生々とした笑ひさざめく聲が人々の中から湧き上る。

然し或る年のこと、此の由緒ある古き宴樂は一つの悲惨な出來事が起つた爲め其れ以來中止されて仕舞つた。其の出來事とは

次の様な事て有つた。丁度此の宴樂の日の朝結婚した許りの楽しい二人の男女が、結婚式に列した人々と共に此の頂へ登つて來た。而して宴半ばに此の二人は少し人中を避けて山頂の崖端に近く寄つて行つた。誤つて花嫁が崖へ足を踏み滑らした時、彼女の夫は其れを止めようとして共に崖下に曳き墜され、彼等の最も幸多き日に於て二人は共に其生命を失ふの悲しき結果と爲つた。彼等の鮮血に染みしと云ふ赤味が、つた岩が今日でも尙ほ指摘されると謂ふ。』(『Voyages', p.375)云々。

以上の如くソッスニールは單にアルプスの風景を叙するのみならず、極く瑣末な人間生活に關しての事をも彼れに興味を起さしめたものは、早速と記録して、其を彼の地質學上の敘述の堅硬な岩塊の如き文中に恰も楔を打ち込む如くに挿入したのである。尙ほ此の當時の彼れの主としてジュラ山地逍遙の敘述は甚だ美文にして、其の生涯ソッスニールの讚美者なりし彼のジョン・ラスキンの愛讀措かざりしものであつた程である。

斯くて一千七百五十九年に於てソッスニールはアカデミーの哲學に關する課程を修了し、學位を得んとする目的の爲めに自然科學に關しての論文 *Dissertatio physica de igne* (4to. pp. 36. Geneva, 1758) を草して是を公刊した。是は彼の最初の著述であつた。扱てアカデミーを終えたる彼れは、彼れの學究の間に一閑暇を得たので、其の間を彼れは以前よりはより廣範圍に亘る山地の遊行に費した。彼れはモール(Mo)の草の圓錐頂に登つた。此の山頂はボンヌヴィル(Bonneville)の上に巍然として聳えて、ジュネーブ近郊より南望しては最も顯著な山頂で有り、モン・ブロンに對しての絶好なる自然の觀望臺であると謂ふ。此の一遊行に依りてソッスニールの青年らしき精力はより廣き範圍に亘つて彼れに旅行を企劃せしむる様に刺激したのであつた。而して就中アルプスの輝く氷雪の呼聲は最も強く且つ切なるものであつた。彼のモールの山頂より望みて、甚だ雄大を極めた高きアルプスの、より近き景を求めんとする熱望は彼れの心胸を燃やした。斯くて、其機會は翌年一千七百六十年のソッスニールの生涯に於ける記憶せらる可き一つの時期たる彼れの、シャモニイ(Chamonix)への數多くの訪旅の最初の訪問と成りて表はれたのであつた。此の訪旅の動機は植物採集と謂ふ事であつた。然しソッスニールは此の彼れの万年雪への最初の散策に關しては其著の中に特別に何物も記しては居らぬ。唯だ彼れの

此時の經驗は 'Voyages' の中に種々なる章句と成つて記されて居るのである。歩行の爲めに歩行すると謂ふ事が元氣な青年に取りては一の悅樂であると云ふが如き年頃に於て、彼れは獨りジュネーブからシャモニイ迄の總旅程哩數にして五十哩を歩いた。サランシヤ (Salinche) 迄登る道路は立派で在つたが、其れ以上のレ・モンテット (Les Montettes) の切通迄の道は辛うじて二輪車の通過出来る程に荒廢したものにて、又危険なる急流が道を横切つて居た。然し若き植物採集者は其の路傍に於て慰藉以上の珍奇なる高山植物を發見して悦んで居たのであつた。斯くてシャモニイに到りて、當時に於ては旅人の訪ふ事甚だ稀有にして又其處に到るにも困難なりとせられし同谿谷を闊無く歩いて、ブレヴァン (Brévan) に登つたのであつた。其案内者は後年彼れの屢々雇傭したりしビニール・シモン (Pierre Simond) であつた。而して彼れは同峯に到りし最初の旅行者であつた。此年のソッスニールのシャモニイ訪問の中にて特記す可き事項は、彼れがモン・プロンを最初に登頂せし者には充分なる賞金を與ふと言ふ事をシャモニイ谿谷の各教區に掲示した事であつた。然し其金額は記録されては無かつた。此年以後ソッスニールは毎年山岳を研究の對象とせる旅行をアルプスに試みぬ年とは無い様に成つたのである。然して其旅行をせぬ間は彼れはアカデミー・ド・ジュネーブに於て熱心なる教授としての日を送つた。ソッスニールは其生涯を通じては勿論科學者として物理學、博物學、數學等を専攻したのであつたが、同時に又希臘羅典の古典學に通じ、哲學の教授でもあつた。而して彼れは先づ最初一千七百六十二年の四月に於てアカデミーに哲學科の教授の空席を襲ふ事と爲つたのである。此の十八世紀の當時に於ては乍而アカデミーの哲學講座の教目は心理學、論理學、倫理學、神學と其に自然科學の一般的な講義を包含せる廣汎なるものであつた。ソッスニールの精勵なる大學教授、研究心高き科學者、政治的敏腕有りし市民としての彼れの生涯の大部分を總べて省略して、唯だ、ことアルプスの登山に關する重要な部分のみを取るならば、洵に彼れの生涯の中に於て其は一千七百七十四年より一千七百九十二年に亘る十八年間に縮少せらるゝのである。而して此期に次いで最も重要な年は一千七百八十七年より同八十八年並に一千七百八十九年にして、此等の年に於て彼れはモン・プロンの登頂、コル・デュ・ヂェアンの滞在、モンテ・ローザ山麓の旅行等を行つたのである。此以前

に於てソッスニールは歐洲大陸各地の大旅行と伊太利訪旅とを爲して居る。

斯くてソッスニールが彼れのアルプスに關する大著『Voyages dans les Alpes』の第一卷を一千七百七十九年に上梓する迄、彼れはアルプスの主脈を八つの異なる峠に依りて十四回越え、主脈の核心へは其以外に十六回の旅行を爲して居たのである。是はソッスニール自身が其自叙傳的記述たる『Discours Préliminaire』の中に誌す所である。(Ibid., p. 6)

以下次號

（以下は本文の大部分が非常に淡く、ほとんど不可読の状態にある。一部の文字は「*Discours Préliminaire*」の語句と推定される。）

第一回インターカレージ・スキー競技會

平塚直秀

全日本學生スキー聯盟主催第一回インターカレージ、ス

キー競技會は去る一月十四、五、六日の三日間にわたり、

秩父宮殿下御臺覽の下に青森縣大鰐、阿闍羅山麓に於て開

かれた。参加校は、北海道帝國大學、小樽高等商業學校、

弘前高等學校、早稻田大學、法政大學、日本大學、明治大

學及び専修大學の八校である。競技種目は、デスタンス競

技(三〇キロ及び十五キロ)、ジャムプ競技、複合競技(コンバイン)(ジ

ヤムプ及び十五キロ)、及びリレー競技の五種で、第一日目

(十四日)は複合競技の十五キロ及びデスタンス競技の三〇

キロ、第二日目(十五日)は複合競技のジャムプ及びデス

タンス競技の十五キロ、第三日目(十六日)はジャムプ競

技及びリレー競技が行はれた。以下各競技の戦績の概略を

記述する。

デスタンス競技

三〇キロ競技 第一日目の午後一時二十分競技開始。一分間の間隔を以て出發し、十五キロの走路を二周したのである。當日は午後二時以後になつて氣温次第に低下し零下四度位にまで達した。成績は次ぎに示す。

- 一、東 條 進君(早大) 二時間五〇分
- 二、岩崎三郎君(早大) 二時間五四分三〇秒
- 三、山口幸一君(早大) 三時間二分二五秒
- 四、山田勝巳君(北大) 三時間七分四一秒
- 五、宮本正雄君(北大) 三時間九分二四秒
- 六、大塚淳次君(早大) 三時間十一分一秒

得點 早大 一七、北大 五。

第七位は北大の宮下君、第八位が明大の緒方君、第九位が北大の中村君と云ふ順である。

十五キロ競技 第二日目午後一時二十分競技開始、戦績は次の如し。

- 一、岩崎三郎君(早大) 一時間二三分三〇秒
 - 二、山田勝巳君(北大) 一時間二八分三六秒
 - 三、中村新一郎君(北大) 一時間二九分二秒
 - 四、千葉毅君(明大) 一時間二九分三二秒
 - 五、長田光男君(北大) 一時間二九分三四秒
 - 六、東條進君(早大) 一時間二九分三七秒
- 得點 北大 一點、早大 八點、明大 三點。

此の競技は今回の競技會中各校とも全力を集中したのであつて、選手数等も四十名を越え、頗る接戦が演じられた。北大は此の競技に於て善戦し一點を獲得した事に依つて殆んど優勝の鍵を握つたのである。

複合競技 (コンバインド・レース)

第一日目の午前九時から十五キロ競技、第二日目の午前九時三十分からはジャムブ競技が行はれた。十五キロ及び

ジャムブの双方の競技得點を合し平均したる複合競技の成績順位を示せば次の如くである。

- 一、村本金彌君(北大) 一六、一五
 - 二、神澤謙三君(北大) 一五、六二
 - 三、杉村鳳次郎君(北大) 一四、八六
 - 四、新井昌典君(法政) 一三、五五
 - 五、龍田不二雄君(北大) 一三、三〇
 - 六、富井宣威君(早大) 一二、三〇
- 得點 北大 一八、法政 三、早大 一。

ジャムブ競技

第三日目午前九時競技開始、成績は次の通りである。

- 一、伊藤健夫君(北大) 一七、九八
- 二、村本金彌君(北大) 一四、四八
- 三、富井宣威君(早大) 一四、二七
- 四、神澤謙三君(北大) 一三、九四
- 五、龍田不二雄君(北大) 一三、二二
- 六、小林辰雄君(北大) 一二、六四

最長不倒距離 二六、八〇米 小林辰雄君(北大)

得點 北大 一八、早大 四。

リレー競技 (約三〇キロ)

第三日目午後一時二十分競技開始。出場校、北大、早大、明大、法政、弘前高等、日大の六校である。北大と早大接戦の後早大一着となる。到着順位を示せば次の如し。

- 一、早大チーム 二時間九分三十三秒
 - 二、北大チーム 二時間十三分九秒
 - 三、法政チーム 二時間十八分三十九秒
 - 四、明大チーム 二時間二十一分十一秒
 - 五、弘前高校チーム
 - 六、日大チーム
- 得點 早大七、北大五、法政四、明大三、弘前高校二、日大一。

第一回インターカレッジ
スキー競技會各校總得點

北大、早大、法政、明大、弘前高校、日大といふ順で専修大學及び小樽高商は得點なく、北大は第二位の早大と得點の差二〇點で優勝し、榮譽ある秩父宮殿下賜杯を得たのである。

總得點表

参加學校	競技種目	三〇キロ	一五キロ	複合	ジャムプ	リレー	總點
北大		5	11	18	18	5	57
早大		17	8	1	4	7	37
法政		0	0	3	0	4	7
明大		0	3	0	0	3	6
弘前高校		0	0	0	0	2	2
日大		0	0	0	0	1	1
専修		0	0	0	0	0	0
小樽高商		0	0	0	0	0	0

リレー競技 (約三〇キロ)

第三日目午後一時二十分競技開始。出場校、北大、早大、明大、法政、弘前高等、日大の六校である。北大と早大接戦の後早大一着となる。到着順位を示せば次の如し。

- 一、早大チーム 二時間九分三十三秒
 - 二、北大チーム 二時間十三分九秒
 - 三、法政チーム 二時間十八分三十九秒
 - 四、明大チーム 二時間二十一分十一秒
 - 五、弘前高校チーム
 - 六、日大チーム
- 得点 早大七、北大五、法政四、明大三、弘前高校二、日大一。

第一回インターカレッジ
スキー競技會各校總得点

北大、早大、法政、明大、弘前高校、日大といふ順で専修大學及び小樽高商は得点なく、北大は第二位の早大と得点の差二〇點で優勝し、榮譽ある秩父宮殿下賜杯を得たのである。

總得点表

参加學校	競技種目	三〇キロ	一五キロ	複合	ジャムブ	リレー	總點
北大		5	11	18	18	5	57
早大		17	8	1	4	7	37
法政		0	0	3	0	4	7
明大		0	3	0	0	3	6
弘前高校		0	0	0	0	2	2
日大		0	0	0	0	1	1
専修		0	0	0	0	0	0
小樽高商		0	0	0	0	0	0

ヘルヴェチア・ヒュツテの建設 (承前)

山 崎 春 雄

ヒュツテの工事中、ヒンデル君はその大部分の日を山に暮した。トラピスト修道院を始めとして多くの大建築の設計監督に關する仕事で、君の一身に輻輳して多忙を極めてゐたのに係らず、或は却つて其の爲めにかも知れないが、

君は出來得る限りの時間を割いて、山の天幕に『逃けて』來ては、見る目も愉快けに自分で働いた。木を擔ひ、石を運び、一々大工に説明し、或ひはモデルを作つて見せもした。ヒュツテのカツセー(金庫)もヒンデル君が一人で細工したもの、又前記の棟木の彫刻もさうである。同君は世界大戦に塙國士官として従軍して負傷(顔に銃劍の創を受けた)し尙それ以來健康を害し、在札中、時に病床に横はることがあつたが、この夏のヒュツテの仕事で奇蹟的に元通りの

健康を回復してしまつた。結局同君は日本の青年のためにヘルヴェチアヒュツテを贈物としてくれた代りに忽ち天より自分の再生の恵みを受けたのであつた。

ドクトル・ワーゼルも、ヒンデル君と同じく生粹のチューリヒ生れで、グブラー君とは『汝』で話合ふ同じコールの仲間である。同君も徹頭徹尾日本びいきの快男兒で、その愉快なアルベンのヨーデル歌は、幾度かあの靜かな白井嶽の麓の森に反響した。

八月一日の瑞西國祭日の夕はこの異郷にある二人の瑞西の人達にはどんなに楽しいことであつたらう。タンネンの下のキャンプの火はこの夕はいつもより赤く、樺皮の火は電燈を欺くばかり明るく人の顔を照らした。火の粉は無數

の星の様に舞上り、下から火光に照された樹々の梢は名匠が様式化したデザインの様、に暗い夜天に浮び出した。世界の瑞西人の中で、我々二人の様に幸福な八月一日を迎へたものがあるだらうかとヒンデル君が眞にさういふ顔付きでさう云つた。

北大スキー部の大野教授も、何度か多忙の時を割いて山を訪ねてくれた。そして飾り氣のない喜びを我々と共に分つてくれた。小屋の仕事が次第に進んで來た八月末頃から登山旅行から歸つて來た學生たちが手傳ひに來てくれた。貝沼、板橋、坂本、井田、岡田等の諸君である。

はじめ工事にかゝる頃には歩行にも困つた林中の熊笹の中にこの頃では立派な刈分け路が出來てしまつた。口善惡ない山男はヒンデル夫人紀念道路と命令した。チロール生れの夫人に取つて海拔僅かに七百米の錢函の峠を越してヒュッテを訪れることは何でもなかつた。たゞ夫人の薄い皮膚に怖ろしい大敵があつた。蚊とぶよと、そして糖蚊と、それからまだある。峠の笹に血に飢えて人を待伏せしてゐるだにの大群。

秋風が早く錢函の山々に訪れて惡虫が影を絶つ八月中旬

にヒンデル夫人も山を訪れてヒュッテの最初の婦人の客となつた。

いよくヒュッテが完成に近づいて來た九月六日七日にヒンデル君は最後に山に行つた。夫人並びに自分夫妻が同行した。早い白樺はすでに黄葉して風なきに散り初め、火の氣のない小屋の夜は寒かつた。翌日小屋とその他の人々に分れを告げて峠の願望に最後の別れを御料の山々に惜んだ。間もなくあはたらしい横濱への旅立ちとなり、今一度ヒュッテへといふヒンデル君の望みはとうとう其時は達せられなかつた。

越えて翌々日、九月十三日に水本もすつかり仕事をしまつて山を降りて來た。獵期開け間際になると尻がむす／＼して山にゐられなくなつて來たと彼は云つた。更に翌々の初獵の日に、彼は自分と共に銃を負つて彼の村のほとりを千歳川の岸へと急いでゐた。豊年祭に賑ふ村のゆきずりの人々は『水本さん長らく山へ行つてたさうだかしつかりもうけたんべ』と口々に云つた。彼は苦笑して答へなかつた。村人の打算的の頭では、水本がそのために山へ行つたと考へるのに無理はなかつた。然しこの推測が當つたかどうかどう

かは建築の『會計係』をつとめた自分がよく知つてゐる。自分は彼に對してこの時ほど氣の毒な思をしたことはなかつた。

彼の獨木舟に水郷の二日を狩暮して、長都沼の芦の聲のほとりに村雨のはれ間をまつ時、我々は平野のあなたに低く垂るゝ雨雲の下の明るい夕空に、紫色に濃く劃された見慣れた山々の天空線をあらためて遠くながめた。

迷澤、烏帽子、神威嶽の線の上に余市嶽の頭が少しのぞいてゐる。小屋はあの下だと自分は彼に指し示した。

來年の春だと彼は云つた。大學生に『足跡』を探させておいてそれからの事だと彼は銃を撫して云つた。折から雲間をもれる日の光に彼の眼は輝いた。彼の策戦といふのはかうである。春ヒユツテに薪切りに登つてゐて、五月の硬雪に春の山を享樂する大學のスキーロイファアを、獵區のゲーム番人に利用しやうといふのである。彼の近頃の慾望といふのは外でも無い。『大學生の半分位』せめてスキーが履ければといふのである。スキーで春に穴を出た熊を一週間追ひつめればもう此方のものだといふのが彼の打算なのである。アイヌの母の血を受けたこの愛すべき自然兒が自然

を愛すると好んで云ふ我々にも測り知られぬ深い本能の力で山への誘惑に心をひかれてゆくことを、何であのかしこい村人が係はり知るであらうぞ。

かくのごとくして我々は長い陣痛の試練を経て、喜ばしいヒユツテの誕生を迎へた。

ヘルヴェチアヒユツテの建設は、多くの人々にはいかにも唐突の出來事のやうに見えたかも知れぬ。自分が最初の喜びを包み切れずに大野君に話した時に、満面に驚喜の色を浮べた同君は『それは柵から牡丹餅の様な話ぢやないか』と云つた。仙臺にゐる松川君に、ヒユツテの位置について相談するために最初の手紙を出した返事には、若い登山家の感激が溢れてゐた。天から降つた幸福だと書いてあつたが然しすべての世の事柄と同じく、ヒユツテの出現も實は長い伏線を過去に曳いてゐるのであつた。

他のすべての北海道の山々と同様に、ヘルヴェチアヒユツテを中心とする地域のエルシユリースングはことごとく我が北大のスキーロイファアによつてなされたのである。



Trojani / 飛躍振ヲ

こゝには絶頂獵者の心をそゝる様な氷と岩の高い頂はど
こにも無い。最も手近い奥手稻は千米を超えない。あの美
しい曲線を持つた和字尻山、小樽内岳、(我等の遙山)不斷
の粉雪をかくす八三八米、皆その仲間である。朝里岳(一
二八〇米)、白井岳(一三〇一米)、及び余市岳(一四八八米)
の三坐に至つて我々は漸く樹林帯からぬき出でた白い頂を
持つにすぎないのである。これ等の山々の貴さは古い支那
の諺の様にその高さにあるのでなくて全くその針葉樹林の

美しさに存するのである。その冬の銀冠を載いた壯麗のさ
ま、その樹海の間で散在する島々である純白の斜面、そこ
の春五月の太陽と雪とスキーとの輝かしい交響樂……………

こゝにこそ我等のヒユツテをと夢想した幾多の若い北大
のスキーロイファの望みが凝つてヘルヴェチアヒユツテを
形成する基礎となつたのでなくて何であらうか。

ヒユツテの計畫がめぐむまでに、その根をはぐくみ育て
た流れの一つの源泉はこの山々のピオニアの一人である
松川五郎君である。グブラー、ワーゼル兩君に始めてこの
地を紹介したのも同君の一隊であつた。ヒンデル君にもへ
ル、マツカワの名は快よく響く名であつた。ヘルヴェチア

ヒユツテにつながるヘル、マツカワとそのロイテの因縁は
殊に深いのである。幸にもこの一月の初旬の數日を我々は
遠く南から訪れた松川君とワーゼル君と共に新しいヒユツ
テに送ることを得たのは、小屋の Binwelling に取つて此
上なき望ましき客を迎へたと云つてよかつた。

さてヘルヴェチアヒユツテの建設について書かるべきこ
とはおほむねこれで盡きた様である。たゞ最後にヒユツテ
に關して一言述べさせて貰ひたいことが一つある。

ヒユツテの設立者たちを初めて山に案内した時に、これ
等の瑞西やチロールの山に慣れた人たちが日本の山の美に
感じて隨所に激賞の聲を放つたときに、我々は正直な愛國
的の誇りを感じた。

この山の美がヒユツテを値すると此の人達は考へたので
ある。山はヒユツテを値する。然らば人は如何。

自分が衷心より希望することは、人もこの贈物に値する
ことを早く設立者の人たちに示したいことである。或は又
それによつて同様な愛國的の誇りを持ちたいことである。

………
* * * * *
………

一月の初めにヒユツテの旅行から歸つた自分はすぐに横濱のヒンデル君に手紙を出してヒユツテの最初の利用の報告とした。左にその一節を記してそしてこの文の終りとすることとする。

親愛なるヒンデル君及夫人。

前略

さてヒユツテの事では今度は書くことが澤山あります。

十二月の二十日から二十二日まで私とグブラーさんとヒユツテに行つてゐて、二十一日にとてもひどい大吹雪にあつたことはもうグブラーさんから手紙が行つたことと思ひます。しかしヒユツテはこの試験に美事に及第しました。

嵐は白樺の梢の高い所で空騒ぎをするだけで、ヒユツテの周囲は無風状態が支配してゐました。私達は小屋の扉をあけたまゝで玄關で氣樂に仕事をしてゐられる位でした。

今やヒユツテは冬の禮服を着て全く奇麗になりました。

我々は一月二日に定山溪から行きました。グブラー、ワーゼル、ネゲリー、松川、須藤及び私の六人です。定山溪からヒユツテまでのルールは夏でも無論美しいがたゞ少々とけがありましたけれども、今では實に氣樂な散歩路です。

川は造材の人たちが十五以上の橋を掛けてしまひました。

ヘルヴェチアヒユツテの一時間手前に札幌の伊藤の小屋の村が建つてゐます。大島の小屋は私等のヒユツテから僅か三分です。大島の小屋にゆく道はヒユツテのすぐ後を通つてゐます。夏の間、私等がバタの容器を水に冷した所に橋がかゝりました。何の事は無いあのタンネンの幹に郵便函を一つぶら下げさへすれば、私等は毎朝、新聞や手紙の配達を受けられやうといふ有様です。

最初の小屋の夜は靜で氣樂でした。釣ランプが樂しげな顔を照らして、皆で食べたり飲んだり話したりしました。話題は勿論、この夏の愉快な思出が主でした。時の經つのがあまりに早すぎました。

翌三日はまづ小屋の^{ヒユツテ}仕事に費しました。といふのはグブラーさんと私と残つて他の連中は『午前のスキー散歩』に出掛けました。グブラーさんは屋根の雪を掻きに上り、私は落ちた雪塊でヒユツテの床下をふさぎました。今まで床下は全く開いてゐたのですがこれで外からの風が吹込まなくなりました。目下積雪の高さは丁度ヒユツテの床位です。午後は皆揃つて午後の散歩兼スプール付けに南の方に出

掛けました。白井嶽の前山の岩のすぐ下まで登り、歸りは殆ど一息にヒュツテの中まで滑り込んでしまいました。こんなよい斜面が小屋のすぐ鼻先にあらうとは夏には想像も出来ませんでした。

夕方松川君のグルツベの三人がおそく六時すぎに到着しました。小栗、加茂、岩垂、いづれも一流のロイフアードですがこんなに時を費したのです。尤も直接夏道を來たのではなく、奥手稻を越え、ルツクサツクも重かつたのですが。

この隙と同時に板橋君はじめ四人の山岳部の學生が來ました。これは定山溪から。これで總勢十三人。

翌四日、私等は余市嶽をやつて見るつもりで、朝六時半に出發しました。我々の『元小屋場』を通り、あの尾根をつたつてまづ一〇九七米の高地にとりつきます。至るところ素敵な斜面、至るところ例のタンネンと樺の公園風景の連続でした。ことに一〇九七米の周圍とそれから朝里につゞく屋根の上が一番奇麗です。この日は銀色の基調が自然を支配してゐて、丸で夢の國の様な美しさでした。

それから遠く波の音も聞えました。私ははじめはタンネンのさゝやきかと思ひましたが實は海から來た音楽でした。

朝里の上で景色はすっかり變りました。見渡す限りの雪の廣原、硬く雪の凍りついた低い樺が幽靈の様に白い平面の單調を破るだけで、こゝは霧と風の世界でした。余市はまるで見えません。こゝまでに豫定よりも一時間以上餘計の時を費したのでこゝで引返すことになりました。

下降路は他の人々には天國の享樂でした。私には面倒くさい斜面落下の物理實驗で、矢張りいつもの様にちつとも計算が合ひませんでした。

皆で勇んで午後早くヒュツテに歸りましたら、醫科の柳教授の一行が來てゐました。これでヒュツテの人口が十七人、言葉で云へばジープツェーンと云ふ大したことになつてしまいました。

しかし萬事うまく行きました。食事の支度は少々混雑しました。といふのは世界各国の人の口に合ふ様なメニューを作らなければならなかつたからです。ヘル、マツカワのロイテはいつもの様に働き、ワーゼルさんも例の通りの料理番の才能を發揮しました。

この際私等はまたく小屋の場所の利用がうまく出來てゐることを感心しました。鍋に手を出す勇氣のない連中は寢

臺の方に逃げ込んで誰の邪魔にもならずすみしました。

翌五日は本當は錢函へまはつて歸宅する豫定でしたけれども、天氣がよくなりそうなので前晩から相談して、今一度、余市をやつて見るようになりました。朝六時二十分出發、一〇九七米が八時四十分、朝里の三角點が九時五十分でした。昨日のスプールを利用したために朝里までに一時間半近くの時間の節約が出來ました。今日は下の方は天氣がよくて森は朝日に輝いてゐましたが、朝里の上に出るころから澤山の雲の塊りが白井のグラートを越してやつて來ました。そして再び、昨日よりも悪い霧と風の世界になつてしまいました。そこで再び余市は思切ることゝしました。下には又々暖かい日光が輝いてゐました。到る所の斜面の滑降を楽しんで早く小屋に歸りました。

ヒユツテは今やタンネンの枝に飾られ、赤い松かさか枝もたわゝにそれから下つてゐます。書籍も、完備した薬局も揃ひました。床下には薪がはいつてゐます。全く氣持のよい山の家になりました。

夕方私等はおとなりの造材小屋を訪問したりしました。ヒユツテの不可避の大切な『場所』も一時少々危険状態

に陥りましたが、ヘル、マツカワがシャベルを揮つて完全に危険からすくひ出してくれました。グブラーさんが大層氣の毒がりましたが、ヘル、マツカワは園藝家ですから別に何とも思はないやうでした。

翌六日、午前八時半、私等はいよ／＼ヒユツテに分れを告げて夏路づたひに錢函に向ひました。

本流の川は所々雪で埋まつてゐて、ために夏路のあの面倒な上り下りをしないですみました。それでもとう／＼こはれた小屋のそばで川をわたる時に小さなウングリユツクを生じました。一人川に落ちたのです。無論ワーゼルさんです。スキ一の尾からすべつて川の中で腰湯をつかつてしまつたのです。救助隊がかけつけたときに一番元氣なのは常人で、橋の下にはいつでもワツセルがあるとやりました。幸ひ水が淺くて天氣が暖かつたのは何よりでした。皆でぬれたものを脱がせて乾いた豫備のものとして着替へさせました。丁度乳母がおむつを取替へる様な光景でした。この不幸で一時間ばかりを費やしました。あとはヘル、マツカワが暫くえらいテンポで山を登りました。皆貨物汽車の機關車の様に湯氣を立てました。これで少し早すぎた冷水浴の悪い

結果から完全にまぬかれることが出来ました。

峠の南のタンネンの森の中で、最後の長い休息をして食事をしました。私たちは徹底的にルックサツクを空つほにしお茶を沸かして語り合ひました。

余市は相かはらず雲の面紗をかぶつて徹頭徹尾不機嫌でしたが、近くの森は温かい日光が輝いて、静けさと平和とが自然に満ち溢れてゐました。

峠から夏路の下りは、今年は馬橋道がついてゐるませんか、いつかの様な地獄行とはちがつて樂でした。

二時すぎに錢函に下りて一寸、深瀧に立寄り、二時四十分の汽車で歸札。停車場前でワーゼルさんに心からの分れを告げました。翌日、ヘル、マツカワも仙臺に向つて出發しました。

實に愉快な旅行でした。こんな愉快な山の旅は全く初めてだと松川君が何度も私にさう云ひました。山もこんな楽しい登山者の一隊をば初めて見たことでしたらう。加茂君たちはこんなに山の旅行で御馳走を食べたのは初めてだと云つたさうです。實際私等のルックサツクは重かつたのです。定山溪からヒユツテまでの間でヘル、マツカワが參

つてしまいました。同君の參つたのを見たのは初めてでした。荷物はまだそればかりではなくて野菜物の一袋は定山溪から馬に頼みました。私等の菜園の産物です。お好きの花椰ブルリョウコルコイや子持甘藍コイコイもありました。馬鈴薯ではワーゼルさんが三度もぶつとけに例の *Bois* をこさへなければなりませんでした。何につけてもワーゼルさんが主人公でした。

それにつけてもすべてがヒユツテのおかげです。今度私等はヒユツテの最大能力の發揮を見ました。ヒユツテがその使命を完全に果すであらうことは今や一點の疑ひもありません。ヒユツテによつて初めてエルシユリーセンせらるゝその背後の領域は實に理想的のスキー地です。それを我々はヒユツテとその建設者に負ふことを私等はつくづく有難く感謝してゐます。(完)

貴君等の忠實なる 山 春 生

スキーに對するワツクスの手法

ハンネス・シユナイダー氏述

宮 下 利 三 譯

おこはり——此の原稿は昨シーズン練習中ノートブックに書き付けておいたものを、今突然此れに再録する事になつたので随分變な所があるだらうと思ひます。その上得る所も亦少いかと思はれます。ワツクスの手法に關する Theorie の一つとして諸賢の御研究の上に何等かの參考にてもなれば筆者の喜びは夫に過したものはありません。次に彼が述べてゐる事は彼自身も云ふ如くに決して目新しい物とは云はれないかも知れません。山とスキー第七十四號九頁以下、第六十八號二十六頁以下、第七十六號七頁以下とも御參照になればその概括的な所論が一層はつきりして來ることと思はれます。

競技の結果は競走者の能力や練習法以外に Bretter (スキー底面) の適宜な手入にも絶大な關係を有してゐます。吾々は常にスキーが出来る丈大きい速力を獲得する様に注意しなければなりません。速力が有する利益は特に緩斜面及び平地の滑走に於て浴する事が出来るでありませう。スキー面が平滑で水氣に對して抵抗力が強ければ強い程滑走の速力は増大するのであります。で此れに就いての豫定條件とも云ふべきものはライン油を良く飽和させる事で而る後にワツクスを Bretter に特殊な塗り方を致します。之は所謂 "Wachseln" で、その正しい技術は昨今吾々が得たのではなく唯長い經驗に依つて色々な障害に時折出會つては漸く習得し得たのであります。ワツクスの塗り方を色々な方法で

研究したり全く個々な方法を創造するのが、夫故最も良い理由です。ですから研究者は勿論他人から聞いた忠告に留意し複雑な雪質の状態を斟酌し競技の初まる前迄には充分吟味した實際的な前例を處理して置くべきです。

次に書く問題は凡て今日普通に知られてる適當な手段や方法で—既述したライソ油の飽和の外に—吾々の *Better* を競技に要する様な或る状態に持ち來らず方法を論じてゐるものです。多くの此等の前例はその各々の研究が過剰になつてゐる程有名でもあり確でもあります。それでも尙各々のスキランナー自身で何の方法が與へられた雪の状態性質に最も適してゐるか批判しなければならぬ所の事項が仲々あります。

Better にワックスを塗る種類は二つの形式をとつてゐます。第一に競技の種類、第二に雪質です。競技の種類に關してはジャムブ、狹義の滑降競走と長距離競走等に區分します。長距離とは平地登行等が交々來る所謂 $1\frac{3}{8}$ システムのものを指します。又雪質に關しては粉雪と温度 0° 以上のときの濡雪とで、春の雪や夏のザラメ雪は（之は歐洲にのみ必要な事項かも知れませんが）その本質上大体同一と見

做します。

ジャムブと滑降競走とは同様に取扱はれます。夫は共に *Better* に出來る丈大きな速力を確實にする—が最も大切ですから、ワックスの塗り方の方法は雜異な雪質に對しても長距離競走の様に大きな差異は有りません。實際多くの方法、種々のワックスがあり何れもが速さを最大にする丈の目的を有してゐるのです。然し乍ら一度世界に比類のないものが出來ると或會社が他を凌いで誰よりも早くゴールに導く様なワックスの製法を案出して來ます。夫故競技者の關心は懸つて多くの可能性の中から常に最善のものを見出す事と存じます。

ラングラウフに於ては又變つた關係があります。此れには平地と登りがありますから降りには僅に全コースの $1\frac{3}{8}$ となつて居ります。夫故、鏡の様にツルツルした面のスキ！では前に進まずに登りばかりぢやなく平地でさへも後滑りで異常な疲勞を來しますから何の價値もない理由です。智巧者の北國人は後滑りを防いで登りには登山スキーに用ひる海豹の皮を着せた様な役目をし、其の反對に降りには速力を高める様な一種のワックスを發見しました。此は今日

所謂スタイグワックスと云はれ既に知名でもあり且實際によく用ひられて居ります。

然し降りに用ゆる一般的なワックスはあらゆる雪質に對して同様に良く用ひられますが、かゝる方法はスタイグワックスには全く主張の出来ない事です。時には粉雪には猛烈にくけれども濡れ雪には何の役にも立たないか或は返つて邪魔をする様な例があります。ですから競技者は常に雑多なワックスの種類並にその用ふる量に關して先づ豫め良く研究しなければなりません。ワックスが硬ければ硬い程より良く滑らせるに都合なのです。簡單に暖い掌で擦り込むワックスもあれば夫に反して只溶かしてスキーに熱いこゝで塗るのがあります。夫のみか *Hot Lamp* を必要とするものもあります。又次には柔い幾分ネバ／＼する製品があります。之は手の平でコルクでスキーに擦り込んで然る後に太陽に當てゝ乾すか或は戸外で冷却し結局は雪の中で凝結させてから用ふるのです。

スタイグワックス中最も良い物としてはノールウエーの *Oestby* で次が夫に見習つて作った *Ober-Wachin* です。又奥國の *Carsen-Wachse* や *Solmische Stigwachse* 等も好

まれて居ります。 *Oestby* にも色々あつて *Oestby 0* が寒い粉雪の時で *Oestby 1* は然し濡れた雪やザラメに適します。又 *Oestby wachse* の用法にも種々あります。粉雪の場合等に全面に極く薄くホンノリと塗るか或は *Binding* の下丈に厚く塗るのです。但し後の方法は濡雪の時に特に適當なものです。多くは全面にワックスを擦り込まずに色々な場所に或ひは多く或は少く種々に播散らして塗つて居ります。瑞典製の *Oestby wachse* は粉雪によく利きます。最も良い方はスキーにワックスを極めて薄い層に延ばして、然る後太陽に當てゝ材に樹脂狀のネバ／＼した(程度のもの)を云はゞ吸取らせるのです。

斯かる方法を何回も繰返へして居ると *Oestby wachse* は嚴寒に際して極めて優れた効果があります。然し競技の直前に此のワックスを塗らうとする場合には豫め一―二時間寒い所に立てゝおいて後に初めて用ふる事が出来るでせう。反對に温い部屋の中から全く新しい雪の上に持つて來ると雪が粘付いてスキーが前にも後ろにも動けなくなるのを直ちに認めるに違ひありません。夫故此等のワックスは競技者が競技に用ふる前に必ず豫め適當に充分な吟味を

する事が得策です。

Sohns'ch-Steigwache も亦寒い時に丈保證されてゐます。急速なスピードを要するものには相當の硬さの物で滑らかに延ばした各々ワックスが適應します。ライン油で手入れをした立派な滑い面を有してゐるスキーは既に夫丈でも、忽にしてゐる物から見たら遙かに滑ります。然し吾々が眞に滑脱な面を所有し降りに大きなスピードを得んと欲するならば下記の様な準備を自分でする丈の勞は探らねばならないのです。

最も簡單なのは Schellack をアルコールに溶解させて吾々の所謂 Schellack-lasur を得、夫を以て今度は Gleitfläche に一結局何回も一(微風のように)極く薄く塗つて云はゞ漆を保持させるのです。此の Glasur が Breiter のあらゆる小孔を埋めてしまふから材が乾燥してしまふ事丈が不利な點です。夫故 Breiter を豫め出来る丈しつかりライン油で飽浸させなければなりません。

ノールウエーでは Schellack を酒精に溶解せずに稀薄な Terpentin に溶解しその良き濾液を奇麗な筆で何回も(十五回) Breiter を豫め Glaspapier で滑に磨いた後に塗

り付けます。然し用ふるに先立つて、その溶液を十五乃至二十日間位放置しておかなければなりません。二人の有名な世界レコードを作つたノールウエー系のアメリカ選手 Lars Hungen と Anders Hungen は彼等のジャムブ用スキーを前述の手法で手入れをして居ります。然し乍らジャムブ競技の直前には彼等のスキーに更にバラフィンを擦り付けて居ます。

ノールウエーではその他に亦色々な種類の硬いワックスを用ひて居り或ひは Breiter にコテを掛けたり掌でシツカリと擦り込んで面の上に少しの凸凹の痕跡も見當らない程にして居ます。バラフィンにコテを掛けたものは濡れ雪には特に良く役立ち、迅速に磨かれますが残念なことに一回乃至二回のジャムブに用立つに過ぎません。ジャムブを終る毎にスキーを脱いでシャンツエに歩いて歸る様にして出来る丈永くワックスの層を保護す可きであります。

塗蠟に際しては溝を忽にしないでその内側も他の面と(Gleitfläche)同様に常に滑らかにして置く可きです。ジャムブのスキーの手入には非常な注意を要します。何

故なら同じ能力を有する競争者の結果は彼等のスキーのスキ

りません。

ビートの如何に懸つてゐます。夫故彼等の中何れがより大なる巧さを蠟の取扱ひに示し得るか、勝負を決定するので

適用すべき準備法殊に各々種多な種類の蠟に關して私は凡て、各自自身が研究して實際的に最も良いことの證せられた準備法を決定する様に再び忠告して置きます。

滑降競走には Lotlampe であつた Holzner が非常に良く利きますが濡雪やザラメでは Schellack-pollirn 程良くあ

(H. Schneider, Moderne Skisport 46)

— 一九二七・三・二三 —

御 断 り

シロイフエルの最も恵まれる、幸福を感じる所の、又最も雪の多い、此の貳月の下旬に、秩父宮殿下を本道に御迎へ奉る事になりました。

その光榮を長く記念致す爲に、四月號を記念號として倍大にし三月號を休刊する事に致しました。又本月號の發刊が選舉で、印刷會社が忙しかつた爲に、非常に遅れた事を御詫び致します。

海外通信

筆に物することの無精さがとうとう St. Moritz へ来るまで崇つちやつて、自分達の山とスキー（おつとつ）の国際的だつたね）外國にまで有名になつて居る「山とスキー」に何も書かないでしまつたことは本當に濟まない、言ひ譯は言はないことに致しませう。

兎に角一行には別に病人も出ずに、大變元氣で漸く St. Moritz に落ついて練習を始めて居ます。然し矢張り旅の疲れは争はれませんが、ラングラウフのロイファーもスプリングのスプリングでも未だ腰や膝がガクリ／＼としてよう滑れんといふ調子です。

東京を立つてから朝鮮、シベリアを一氣に飛ばして漸くモスコイまで一人僅か三十圓足らずの小使で偉く節約して、（然し飯を食べただけは充分飯ばはしたが）やつて來たのに、汽車の延着の爲とうとうモスコイで一泊せざるを得なくなつちやつて、モスコイの一泊で諸経費合せて四十圓近く飛ばして終つたことは何と言つても寢覺めの悪いことの一つとなつて終ひました。お蔭様で何時見らるゝことやら判らないモスコイの大市街を僅か半日ではあつたが相當見物することが出來てせめてもの慰みでした。

ポーランドの首府ワルシャワで小一時間程の暇を利用して町見物しました。

十二月卅一日、母國では大晦日の鬼の横行で大騒ぎの晩にワル

シャウの夜の街の見物は又一入異國情緒を興へてくれました。此處の驛を出る時に飛んだ宿引に危く引つ懸る處さ。フランス語、ドイツ語、英語、ポーランド語、ロシア語どれもこれもペロン／＼に繰つて宿へ連れ行かうとする腕前は到底／＼日本の宿屋引きなどは遠く及ばぬ凄腕です。さういふ巧みな腕前で誘ひ來る奴をアツサリ受け流して行く腕前には一寸感心するだらうが、どつこいさう早く我點されては困る。なほに人數の多勢と無言の挨拶さ。

St. Moritz へ来る迄の内、第一に心残りしたことは、例のモスコイの一泊、お次がモスコイからポーランドへ入つて行くに従つて雪がだん／＼積くなつて、少くなつてとうとう／＼ベルリンで完全に雪の姿が見られなくなつちやつたことでした。

ベルリンの三日間は、儉約々々の生活で万事切りつめた生活をして送つたことが恐らく記憶に残ることとせうさ。

ベルリンの物の安いのに驚いた。買ひ整へて行きたいものも相當あつたが歸り／＼でとう／＼だめさ。巴里に行くと尙安いと云ふ話、巴里に行きたいが二月十九日以後はどうせ金と相談であつて見れば、誠に心許ないことさ。人様から金を貰つて來て自分の好き勝手ものを購ふ譯にも行かんからぬ。

ベルリンでスポーツハウスへ行きは行つたが、大して珍らしいスキー具やスキー附屬品もなく、ガツカリしちやつた。だ、Ulla Palast へ例の雪のみ本名 Hans Schneebeger 君主演の "Der grosse Sprung" といふ一寸一時間半ばかり時間を費すスキーの喜劇寫眞を見たことが、とても收穫だつた。然し面白い寫眞と言ふだけでテヒニツシエには大した物ぢやないね、處が St. Moritz へ來てか

ら例の本物の雪のみ君會つたんだからとても愉快き、雪のみ君も例のフランク君も今 St. Moritz へ来て遊んで居るんだよ、兩君から記念にサインをして貰つたよ。そしてね、お前達の有名な名前には日本て四年前から聞いて居たよと言つてやつたら、喜んで居たぜ。体の小さいこと、後頭部の發達して居ること、愉快の顔をして居ることは寫眞と變りはないが寫眞で見られぬ顔の色と味ふことの出来ぬ「握り合せ」の手の感じだけは、くやしからうが兎に角僕は知つたよ。

今ね今度のオリンピックの寫眞の良い奴を作る準備に来てるんだつてき。彼は今三十二才だ相だ。どうやら彼は *Alle Klasse* に入ることになるらしいね。

チュリツヒの滞在は、餘りに慈まれ過ぎつちやつたよ。西郷さんといふ方に大へんお世話になつちやつてね、大へん氣持の良いホテルに St. Moritz のホテルの都合で四日も滞在しちやつたよ。グラブアさんのお父さんのお家はチュリツヒの町から遠いんでとても泊れさうもなく、とうとうホテルに泊つちやつたんですよ。グラブアさんには、本當に濟まなかつたが之も仕方なかつたんだよ。チュリツヒのスポーツハウスにも何にも物はなかつた。ジャムプやアイスダンススキーは札幌の中野の店のより良いものなんか一つもなかつたよ。然し St. Moritz へ来てから見たんだが、流石にノールウエーのジャムプのスキーは良いがあるぜ。伴は一臺買ったよ。やつぱり良い奴は高いロヨツコリで一臺材だけで三フラン、邦貨の約三〇圓位だよ、ホキ／＼一シーズンに何臺も折るやうぢやこんな高いスキーは買ふ譯に行かんが折らない自信

がついたら買つても悪くはないと思ふね。

ビンドウングもノールウエーの奴が最上だね。伴はハウグバツケンをつけた。一行の人もハウグバツケンをつけた人もある。僕は他の變つたビンドウングをつけやうと思つてる。要するに山とスキーの道具が日本に餘りに紹介され過ぎて、そして僕達が餘りに見すぎて居るよ。だから餘り珍らしいものはないよ。

サン・モリツツの町のことなんか書いて居る暇がないから競技に關することを少し書かうね。

改造されたオリンピックアシヤンツエでのスキージャムプ大會。

十二月二十六日(一九二七年)

新聞記事によると次の様な結果になつて居るよ。

ハンニ (15才—19才迄)

(1) Müller Christn (St. Moritz) 15.763

(2) Jegen (Klosters) 14.585

(3) Albrecht Mathias (St. Moritz) 13.638

(4) Mithbauer Albert (St. Moritz) 10.277

Senior (20才以上)

(1) Trojani (Gstaad) Note. 61.57.62

(2) Sverre Lislegaard (Norway) 61.64.63.

(3) Eidenbenz Hans (St. Moritz) 43.51.51.

(4) Fieismann Hermann (Zürich) 46.53.52.

(5) Badrut Adelf (St. Moritz) 52.50.52.

(7) Vuillemin 41.850, 57.56.61.

以下二等まで賞を貰つた様だ。

僕達が此處へ来てから友達になつた Mithbauer Seppi 君は二等で入賞して居るよ。Junior の 4 等の Mithbauer Albert と 3 等の弟だよ十六才だ。兄貴は二十六才だよ。兄貴の方はとても

スタイルが良いぜ、此間皆で始めてオリムピアジャンツエへ行つた時、やつて来て二回飛んで二回立つたよ。樂々と五〇米以上飛んで居たぜ。弟の方は温厚の様な感じのするとても愉快な少年だよ。今日チュリツヒで工業學校へ入學するんで行つちやつた。いろ／＼世話してくれるし、伴の良いジャムブ友達だったが居なくなつて惜しいことをしたよ。兄貴は一月の八日にオリムピアで五十六米飛んで立つたよ。賞外であつたが麻生君が同じ競技會に出て十五等になつて居るよ。成績は *1st 150 Heaves 205.44m* 米だよ。然し未だ麻生君の下に大分賞外のジャムバアが居たようだ（新聞紙上で見ると）麻生君はとても元氣だよ。

一月十五日（日）絶好日和、無風、ホントレシナジャムブ競技會見學す。ホントレシナはサン・モリツツから歩いて一時間程かかる。山を越えて皆で歩いて行つたよ。スプリングバインのコンデイションは米つては居ないがまるで踏み固められて居て、轉んでも穴があかない程だつたよ。斜面はどうも東南の様だね。て一日中日が當つて居るよ。アプローチは一二〇米位もつてあつたかと思ふ。とても急だよ、最大傾斜三十八度は大丈夫ある。巾は一〇米はある。バインの中が廣いので氣持が良さうだ。ジャンツエは以前は岩で築かれて居たらしいが、それを一〇米位引つこめて雪で一米半位積んであつた。とても下向きた。約十三四度は大丈夫ある。ランディング斜面は百米はあると思はれた。巾は矢張り廣くて二〇—三〇米位あるよ、最大傾斜三十五度はあらうと思はれた。見物の物凄いこと、ケバ／＼しい有様は一寸今迄内の方では見たことがない。定刻迫ると *Musie* の合圖で素敵な音を立て、オー

ケストラが始つてそれから一曲終ると、ジャンツエの端の男が大きなメカホンを持つてバインフライを繰返すよ、そしてその男が選手の名を呼ぶよ、それと同時にジャンツエの一方の端に居る旗振りジャンツエに横に下ろして居た旗を振り上げる。そうするとジャムバアがスタートを切つて飛び出すよ。

今日の大會は先づ中歐での第一流處の顔合せだつたよ。

見物席はやつぱり入場者で一パイだつた、森といふ程ではないが餘り遠くからは見物が出来ぬやうに出来て居るから、どうしてもよく見やうとするのを金拂つて入場するよ。僕達は *Japanische Ski-Mansschaften* の理由で無料で、見物席別ていふと特等席に納まつて見學したよ。麻生君と伴と申込んで置きはしたが伴が練習不足なので出場しなかつたよ。

六〇—七〇のレコードがざらに出たよ。とても日本のジャムブなんか問題ぢやないよ、飛び方を變へる必要があるのは言ふまでもないが良いレコードを出すには大規模のジャムブ臺がなくつちやとても駄目だと痛切に感じたよ。日本のジャムバアが一番毛唐臭い飛び方をして居るのが村本の飛び方だよ。あの思ひ切つた踏み切り方と、もう少し体を臺の端を離れる時に斜上方にグンと伸ばして行つたやり方だよ。然し筆で言つたわけぢや判りにくいと思ふね。先づ飛び方の力の入つて居るのと素張らしく飛んで行く有様はとても見なくつちや想像つかんと思ふ。やつぱりジャンツエの規模の大きいのとスピードのあるのとで自然体が前に行つて体が前にかゝるのだと思はれるね。然しまあテオリーはもう少しいろんな大會を見てから考へて見る。

どうもシヤンツェの作り方、特にアプローチの作り方は昔僕達が考へて居た時代の作り方に迫り相だ。とても下向きだよ。オリムピヤンツェも不敵一〇度位にはなつて居る。今日の顔合せを一寸名をあげて見やうね(但し僕の今迄知つて居る程度)

Bensoni Luigi (Italian)

Kaufmann Fritz (Schweiz)

Mühlbauer Sepp (Schweiz)

Haider Carl (Deutschland)

愉快なことは次の連中が名の順で抽籤で並んでたよ。

Recknagel Erich (F17)

Fenz Ernst (Schweiz)

Erdlenbenz Hans (Schweiz)

Glass Walter (F17)

Neuner Karl (F17)

Vuillermier Gerard (Schweiz)

Trojani Bruno (Schweiz)

Müller Gustav (F17)

此處へカル、センが来れば見物だつたと思ふが、今日は来なかつたよ。最長不倒が七二米でトロヤニイが作つたよ。小さい男で丸鼻まあコロリとした体の主だ。とても精悍相だね。此の男は十二月廿六日のオリムピアで一等をとつて居る、今度のオリムピアでの優勝候補だが、兎に角今日の大會は概して皆レコードを目指して飛んで居たやうだよ。て轉ぶ率も多かつた。一流處が三回の内一回づゝ轉んで居たよ。ウイルミイが七三米飛んだが惜しい處で轉んだよ。ウイルミイといふのも体はむしろやせて弱相だが元氣だね。どつちかと言ふとフワイテングスピリットの強い方だと思ふ。アルターグラースも一回轉んちやつたよ。然し今日見た内

ちやフワイトもランディングも一番落つきがあつたね。此男昨年スウイスの選手権をとつた男だよ。

カル、センのとつたカップはとうとうドイツの手にとられたよ。今日の成績の精しいことは未だ新聞が出ないから判らないが兎に角一等はドイツの Recknagel Erich だ相だ。之はドイツの新進らしい。僕が見物して一寸評價した印でも Gut と書いてあつたよ。落ついて飛んで居たし、レコードも相當出して居たよ。麻生君が二回目の飛躍で脇を痛めたんでカイホウしたりして居たんでつい二回目に此男がどれだけ飛んだか判らなかつたが、三回目に三米飛んで居たよ。て去年カル、センのとつたカップが此男の手に入つた譯さ。何れ新聞を見てから精しく書かう。明日イタリーへ立つので今日は忙しくて駄目だよ。

僕等は二十三日—二十九日までの國際大學々生ウインタースポーツ競技参加の爲十七日當地出發、大會場イタリーのコルチナダンベツツオに行くことになつたよ。汽車及び宿の事に就ては非常な好意を受けるよ。種目は、スキーは一六軒以上のラングラウフ、滑走競走、スラローム競走、ジャムプ、スケートの方はフィギュアとスピード、アイスホッケーだ。ホツプスレイもある。總得点の多い學校が優勝だよ。詳しいことは何れ書く。競技終了直ちにサンモリツツへ歸る。それから此近くの大會でサン、モリツツドルフの大會がある。二月二十一日—二十二日の二日間。

種目、第一日目、一八軒以上の長距離(二〇才以上)約七軒以上のラングラウフ・スラローム

婦人競走、第二日目、ジャムプ競技、オリムピアシヤンツェ、大体こんなプログラムですよ。又此大會で恐らく前のボントレシナで顔合せした一流が集ることとせう。ラングラウフもオリムピアでの前でさぞつ揃ひが集まることと思ふ。(廣田生)

北前鐵道大學スキー部同山部編

青 山 温 泉

北海の靈峰マツカリヌブリに

連亘するシリベシの山稜——

山稜を飾るタンネンボイメと

ブルフェルシユネー

東洋のサンモリツツと

稱せらるる

理想的スキー地！

函館驛本線昆布より一里半

札幌より一五時間

函館より一七時間

北海道上帝國大學キス一部及同岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十番街

木本靴店



SKI HEIL

スキー

ト

其用與全般

中野商店

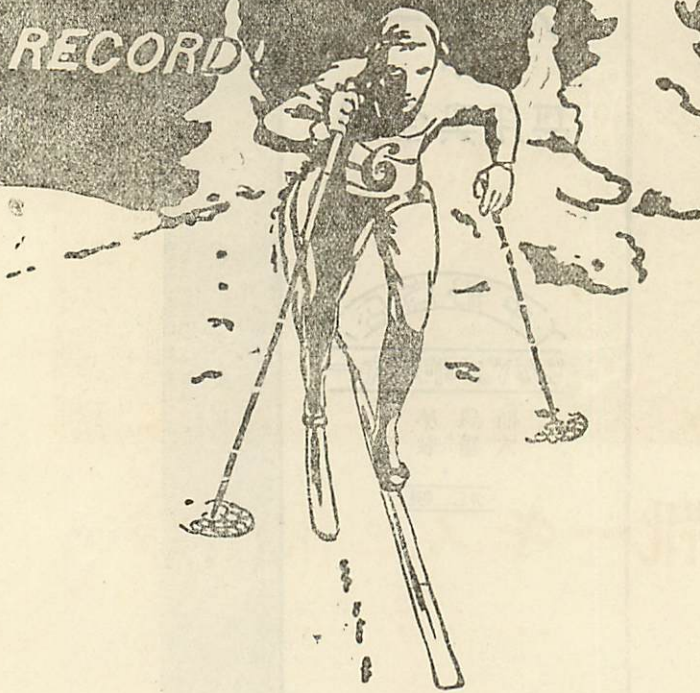
スキー即ハバ

第一級
大量生産

此帳



GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!

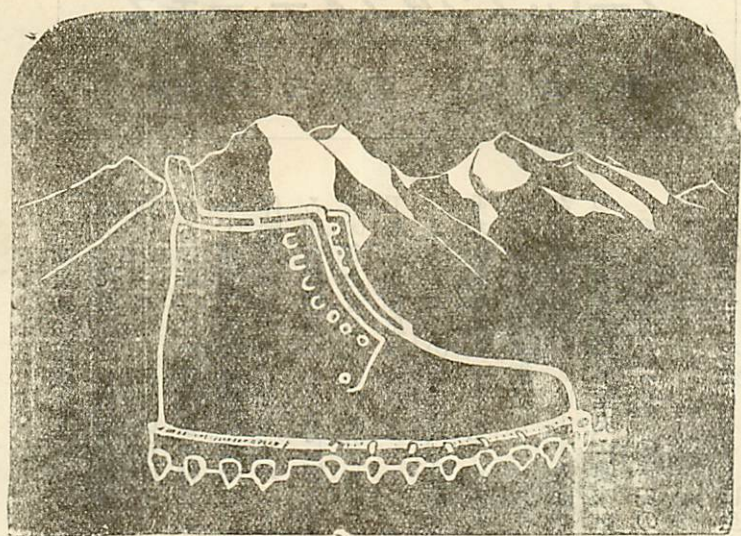


具用其ト一キスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

テ於ニ會覽博藝工產畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

岡村源太郎遺稿集

スキー・スタスイデーキス

ツクト三頁・定價二圓

吾國最初の万国オリンピックのスキー派遣選手の一
人として雄々しい活躍を期待された彼だつた。今や冬
期オリンピックにての彼の僚友等の情報が日々に傳へ
らるゝ時、この遺稿集を世に送る事になつた。このス
キー界劃期的の時期に當つて、彼の日頃の血出る如き
体験から出たデイスタンスレース並びにスキーに對す
る研究は當然一冊の本に編まるべきであつた。只遺稿
集の名を冠しなければならなかつたのは何とした運命
であるかと思はれる。

さうしたこの集には、彼がスキーに志して以來の貴
重な研究を「スキー・デイスタンス・レース」なる題
名のもとに全部網羅した。スキー・レースの走法、練
習法等々のレースに志す人は勿論、又急速に進展しつ
つあるスキー界の歴史に興味を持たれる人、否スキー
に愛を有せられる凡ての諸氏の御讀み下さる事を希望
する。

「彼はスキーを愛しスキーに生きた。」

三月下旬の版出豫定、限版なれば至急遺稿出版係宛申込まれた。

札幌市北四條西二十丁目二番地

山とスキー出版部

振替口座川樽八四九番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送ります。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は

頂きます。

昭和三年一月廿八日印刷

昭和三年二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 井 出 英 次

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北四條西十二丁目一番地

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 79. Februaro 1928. Sapporo. Japanujo.

美 滿 津 特 製
スキー用具と山の道具！
其 他
アイス・ヤット及びボツブスレー
アイス・スケート新荷着！



合 名 會 社
美 滿 津 商 店

東京・本郷・赤門前

.....(切.....取.....線).....

東京本郷赤門前
美滿津商店御中

下記の所へ型録「秋より冬へ」郵送
せられたし。

姓名
住所

東京本郷赤門前
美滿津商店御中

下記の所へ型録「春より夏へ」郵送
せられたし。

姓名
住所

大正十五年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年一月二十八日印刷納本
昭和三年二月一日發行

山とスキー 第七十九號

定價金參拾錢